

# 平野邦雄教授のご退任にあたって

大 隅 和 雄

平野邦雄先生は、1970年10月に文理学部史学科の教授に就任されて以来、20年6か月の間在職なさり、本年3月末で定年退職された。

先生は1923年3月24日に、島根県松江市にお生まれになり、県立松江中学校から、旧制の松江高等学校を経て、東京帝国大学文学部国史学科に入学された。在学中学徒出陣で海軍に入隊されたが、戦後大学に復帰されて、坂本太郎教授のもとで日本古代史を専攻なさり、1948年に国史学科を卒業、1951年に九州工業大学講師となられ、同大学の助教授、教授をおつとめになった後、1967年に文化庁の主任文化財調査官に就任されて、史跡保存のための激職にあること3年半、東京女子大学においてになり、研究と教育の生活に戻られた。

先生は、大学卒業後一貫して古代史研究の道を進んでこられたが、特に日本の国家形成期の歴史について、基礎的な研究を続け、多くの成果を上げられた。『大化前代社会組織の研究』（1969年。吉川弘文館）『大化前代政治過程の研究』（1985年。吉川弘文館）は、先生の研究を集大成した大著で、その成果は律令国家の形成期の研究を大きく前進させた。また、『和気清麻呂』（1964年。吉川弘文館）は、奈良時代末から平安時代初頭にかけての政治史を的確に描き出したすぐれた人物研究として、逸することができない。先生の学風は、徹底した史料の吟味と、堅実な実証の上に成り立つ極めて正統的なものであるが、広い視野の中で問題を見据え、明晰な見通しの下に論証を進め、歴史像を剔出して行く論鋒の鋭さは、余人の及び難いものがある。

古代史研究の最先端に立つ一方で、先生は学界のための基礎的な仕事にも、努力を続けられた。九州工業大学在職中に開始された、『日本古代人名辞典』全7巻の編纂では、竹内理三、山田英雄両教授との共同作業の中心となって、筆舌に尽くし難い苦勞を重ねられ、史料で確認できる奈良時代終りまでの、全ての人名を網羅するという、世界でも例がない歴史人名辞典を完成させて、日本古代の研究に大きな貢献をされた。30年前に平城宮址で発見されて以来、古代史の史料として注目を浴びるようになった木簡研究の中心に立ち、現在、木簡学会会長をつとめておいでになるのも、そうした御活動の例である。

精励恪勤な先生は、九州工業大学にお勤めの間に、古代の産業史・技術史の研究を開始して、研究のおくれがちであった分野に新風を送り、福岡県に住む歴史学者として執筆に応じられた『福岡県の歴史』（飯田久雄氏と共著、1974年。山川出版社）は、県史シリーズの中の好著として知られている。

日本経済の高度成長が始まった1960年代の後半以降、列島改造に沸く日本の各地で乱開発が始まった。開発に追い立てられての考古学的な発見は、マスコミを賑わせたが、その背後で進む史跡の破壊は、猶予できない事態になっていた。そうした中で、1967年に文化庁の主任文化財調査官となられた先生は、史跡の調査と保存の基本方針の策定のために奔走された。在任3年半の間の先生のお仕事ぶりは超人的なもので、大宰府、多賀城などの重要な史跡の調査と保存のために進められた施策は、その後の史跡保存行政の基本になった。

東京女子大学に転じられた後も、文化財保護の仕事は先生を必要とし、現在も、文化庁文化財保護審議会専門委員、奈良国立文化財研究所平城・飛鳥・藤原宮跡調査整備指導委員会委員の任にあり、福岡県大宰府史跡調査研究指導委員会、福岡市鴻臚館跡調査研究指導委員会では委員長をおつとめになるなど、その他、史跡文化財関係の諸委員会で指導的な役割を果たしておられる。

先生が東京女子大学に御着任になった時、史学科には日本史の教員は一人もいないという事態であったが、先生を中心に日本史専攻の整備が進められ、史学科は大学院を開設して、充実への道を進むことになった。また、東京女子大学図書館は、先生が館長をおつとめになった間に、機構の改革を進め、充実のための基礎を築いた。さらに、困難な問題を抱えた時期の長期計画検討委員会で、指導的な役割を果たして解決の方途を探り、大学の発展のために努力されたことも記憶に新しい。

教室での先生は厳格で、講義・演習は学問的な緊張があふれていたと聞くと、研究者としての気概に満ちた指導を受けて、日本古代史を専攻した卒業生の中には、学問的な関心を持ち続ける人があとを絶たず、古代史研究の集まりが続けられ、先生は御多忙を極める中で時間を割いて、研究会に出席されてきた。今年、先生の御退職にあたって、研究会の成果が刊行されることになったのは、うれしいことである。先生を頼りにして学問を続けようとする卒業生の集まりは、まだまだ続きそうである。

史学科が毎年行っていた研修旅行では、史跡文化財に詳しい先生に特別にお世話になった。現地での先生の解説はいうまでもなく、各地の教育委員会、史料館などとの連絡をはじめ、先生がおいでになったことで、充実した研修旅行を続けることができた。学生は一度の旅行であったが、毎年参加することができた私は、旅行の間に教えて頂いた多くのことが忘れられない。長い間一緒に仕事をし、懇切な教えを受けてきたことを思うと、先生が御出席でない研究室会議などありえないような気がするが、大学のさまざまな雑事から離れて、存分に研究を進められ、いつまでもお元気で、後進を指導して下さることを祈ってやまない。とりあえず、御退任を機に、長年にわたる御苦勞に対して、深く感謝し、御礼申しあげることにはしたい。

先生の略歴と業績目録は、史学研究室発行の『史論』第44集に掲載されているので、詳細はそれを御参照いただきたい。